生物多様性は、私たちのいのちと暮らしを支えています。

生きものがうみだす大気と水

私たちの呼吸に必要な酸素は、数十億年の間に植物の光合成によりうみだされてきたものです。雲の生成や雨を通じた水の循環、それに伴う気温・湿度の調整も、植物の葉からの蒸発散や、森林や湿原などが水を蓄える働きが関係しています。

暮らしの基礎

農作物は、害虫やそれらを食べる鳥、受粉を助ける昆虫、土壌中の微生物などのさまざまなつながりの中で育ちます。また、海の幸である水産物も、プランクトンや海藻、貝、魚などがつながりあう海の生態系の恵みです。

生きものと文化の多様性

私たち日本人は、四季の移ろいとともに変化する風景、鳥や虫の声、山や海の幸をもたらす豊かさと、自然災害をもたらす荒々しさを持ち合わせた自然を前に、独特の自然観をはぐくみ、さまざまな知識、技術、豊かな感性を培ってきました。

自然に守られる私たちの暮らし

豊かな森林は、山地災害の防止や土壌の流出防止、安全な飲み水の確保につながります。サンゴ礁やマングローブなど自然の海岸線が残されていた地域で津波の被害が小さかった例も報告されています。

身近な生物多様性を守る

NPO法人くすの木自然館　浜本 奈鼓さん

生物多様性というと、難しくて自分に縁がないようなイメージを持ってしまいがちですが、難しいことは全くなく、誰もが関係する、とても身近なことだということをまずは知ってもらいたいと思います。

私たちはさまざまな生物と関わりがあります。例えば、食糧ですね。肉や魚、野菜などは海や土壌、気候によって影響を受けます。私たちが汚れた生活排水などをそのまま捨てる。そうするとまず近くの川が汚れてしまいます。そして、その川とつながる海が汚れてしまいます。海が汚れるとプランクトンや魚が生きていけなくなりますね。すると、その魚を捕食していた鳥などの食べるものがなくなる。また、有害物質を含んだ海水が蒸発して雲となり、雨を降らせると土壌にも影響があります。どこかが途切れたり、バランスが崩れたりしてしまうと、遠からず全ての生物が影響を受けることになるのです。

生物多様性を知るためには、まずは身近な衣食住などの分野に関係するさまざまな生物について考えてみることが第一歩だと思います。

干潟の代表的な生き物、マメコブシ。横歩きではなく、真っすぐ歩くことができる

錦江湾奥最大の重富干潟
（写真提供：くすの木自然館）

希少動物の保護

蘭牟田池のベッコウトンボを保護する会　山元（やまもと） 正孝（まさたか） さん

蘭牟田池は、平成17年に「泥炭形成植物群落（浮島）」や「希少種ベッコウトンボ」が生息する貴重な湿地として、ラムサール条約に登録されました。蘭牟田池の特徴はそれだけではなく、渡り鳥の越冬地になり、多くの希少な植物なども生育していることです。

私は、ここでベッコウトンボの保護監視員として生息数確認を行っています。平成22年は、前年の大渇水の影響のためか、ベッコウトンボが激減し、79匹しか確認することができませんでした。蘭牟田池の水は農業用水としても利用されていますが、この年には農家の方々にもご理解、ご協力をいただいて農業用水のための放水量を調整するなど、ベッコウトンボの生息数を増やす対応を行いました。その結果、だんだんとまた生息数が増えてきていることが確認されています。

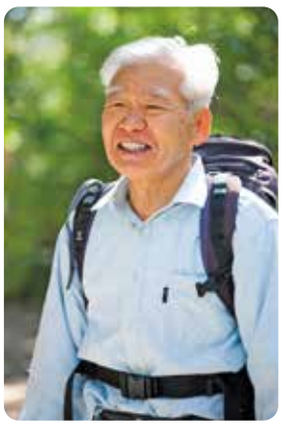
観光地としての価値を高めること、動植物が数多く生息する貴重な場所としての原風景を守ることのバランスが難しいと感じています。現在もさまざまな角度から調査が行われており、その結果を踏まえて「いむた池愛好会」を中心に、より蘭牟田池の湿地に適した環境保護を行っていきたいと考えています。

茶畑から見た蘭牟田池

「いむた池愛好会」によるベッコウトンボ観察会の様子

大隅半島に広がる照葉樹原生林

NPO大隅照葉樹原生林の会　角田（つのだ） 富士光（ふじみつ） さん



九州最南部に位置する大隅半島の肝属山地周辺は、タブノキ、イスノキなどの照葉樹林が広がっています。照葉樹林の広がる山は、まるでブロッコリーのように、もこもことした外観になるのが特徴ですね。

この森には、絶滅のおそれのあるクマタカも生息しています。エサが豊富なんですね。そして、そのエサとなる動植物を支える森が豊かだということです。全国的には問題となっているシカによる被害も少なく、昔のままの手つかずの自然が残っています。しかし、その自然の中で息づく希少植物などが盗掘の被害にあっています。自然の中においてこそ素晴らしいものであるのに、非常に残念なことです。

また、この森には多くの巨木も生えています。年間で数十本が自然に倒れてしまいますが、そのことによって、一帯に光が多く差し込むことになります。すると、光を好む植物がまず育ち、そして次に日陰でも育つ植物がどんどん大きくなって世代交代が行われる。そこにも多様性が生まれているんですね。

カノコソウ
少し湿った山地に自生する多年草

大隅照葉樹の森

屋久島の狩猟と生物多様性

上屋久猟友会　牧瀬（まきせ）　一郎（いちろう）さん

屋久島は、世界自然遺産に登録されて、今年で20年になります。その屋久島では、以前は山間部でしか見ることのなかった野生のシカやサルなどの数が増え、近年は海岸地帯まで下りてきて農作物に被害を与えています。さらに農作物だけではなく、以前は食べることのなかった固有種の植物なども食べるようになってきています。

このため猟友会では、シカやサルの保護ということにも十分気を配りながら、有害なものについて捕獲しているほか、環境省・林野庁・県の捕獲調査にも協力しています。地元猟友会の捕獲したシカの固体測定や下前歯（※1）のサンプリングを提供するのです。また、シカの生息数を調査して、全体の生態系を壊さないためには、どの程度捕獲すればよいのかといった検討も行っています。

現在、わな猟の免許をとる人が増えてきています。これは単にシカを捕獲したいということではなく、人里まで下りてきたシカが個人の家庭菜園などに被害を与えていることから、自己防衛のために捕獲するためのものです。町でも免許取得費の免除やわなの貸し出しを行っています。住民と行政が一丸となって、世界自然遺産屋久島の豊かな自然と人々の暮らしが共存できる体制づくりに努めています。

（※1）下前歯でシカの年齢がわかるため

永田いなか浜
日本有数のウミガメの産卵地

世界自然遺産地域内でエサを探すヤクシカ

奄美群島の希少動植物を守る

環境省　奄美野生生物保護センター　石川（いしかわ）　拓哉（たくや）さん

奄美大島では、昭和54年頃に住民の日常生活を脅かすハブを駆除するためにマングースを持ち込んで放ちました。しかし、人間の思惑とは異なり、マングースはハブではなく固有種であるアマミノクロウサギなどを襲っています。マングースにとっては、猛毒をもつハブではなく、ウサギなどの比較的のんびりした動物たちの方が襲いやすかったのでしょう。マングースは増加し、一方で狙われた動物たちはどんどん減少していきました。

そうした状況を受け、環境省は平成12年から本格的な駆除に乗りだし、平成17年には奄美マングースバスターズという専門チームも結成しました。その結果、かつて1万頭と推定されたマングースの生息数は、現在３００頭程度にまで減少してきていると考えられています。そして、近年、マングースの被害にあっていた動物たちの生息数と生息域の回復が確認されるようになりました。奄美大島からのマングースの根絶を目指し、これからもわなの改良やマングース探索犬の導入など対策の充実を図っていく必要があります。

野生動物の生息状況を把握するための調査や交通事故対策、環境教育など、このかけがえのない自然を保全するための取り組みを、地域の方々と一緒に続けていくことがとても重要だと感じています。

オオトラツグミ
奄美大島だけに生息し、絶滅の恐れがある鳥

奄美群島国定公園特別保護地区のマングローブ原生林

生物多様性の危機

日本は周囲を海に囲まれ、南北に長く、雨量にも恵まれており、本来、生物多様性は豊富であるにもかかわらず、現在、さまざまな危機にさらされています。

第1の危機

人による開発や活動など、人が引き起こす負の影響による危機があります。開発による生息・生育地の減少や環境の変化、珍しい生き物の乱獲や盗掘が現在も続いています。

第2の危機

第1の危機とは逆に、自然に対する人の働きかけが減少することによる影響です。かつては、薪や炭、屋根葺きの材料などを得ていた場である里山や草原が利用されなくなった結果、それまでの姿とは形が変わり、その環境に適応し生息していた生き物が絶滅の危機にさらされている一方、シカやイノシシが増え、さまざまな問題を引き起こしています。

第3の危機

外来種や化学物質などを人が持ち込んだことによる生態系の攪乱（かくらん）があります。国内の他の地域から持ち込まれたものを含め、ブラックバスやマングースなどの外来種は、ずっとそこで生息していた生物を捕食したり、生活する場やエサを奪ったりするなど、地域固有の生態系を脅かしています。また、化学物質の中には動植物への毒性を持つものがあり、生態系に影響を与えています。

第4の危機

近年では、寒冷地帯でしか生きられない生物が地球温暖化による環境の変化で絶滅の危機を迎えています。

サンゴの白化や熱帯の病害虫の侵入が心配されています。

生物多様性鹿児島県戦略（仮称）策定の取り組み

県では、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本方針を明らかにし、生物を取り巻くさまざまな問題に対して的確に取り組んでいくために、「生物多様性鹿児島県戦略（仮称）」の策定に取り組んでいます。鹿児島の豊かな自然を守りながら、それらを活用した個性的な地域づくりに取り組むとともに、その戦略づくりを通じて環境保護の先進性を示すことや、県民の方々にもっと「生物多様性」に注目してもらうことなどを目指しています。

「生物多様性鹿児島県戦略（仮称）」は、生物多様性とは何か、その重要性と理念を示す内容や現状と課題、鹿児島での取り組みの基本方針などを含む戦略編と、自然保護の個別施策、鹿児島の産業と生物多様性との関係、共生・協働による保全などを盛り込む行動計画編等で構成することとしており、平成25年度中に策定する予定です。

生物多様性を守るための一人一人ができること

生物多様性が失われることは、私たち人間が今まで自然から受けていた多くの恩恵を失うことにつながります。一度壊してしまった生態系を再生するには、莫大な費用と時間が必要です。また、一度絶えてしまった種は、二度と取り戻すことはできません。現在、地球上に生息している生き物を絶滅の危機から守り、生態系のバランスを修復することで、生物多様性を守り、次世代へ引き継ぐことができます。

○身近な生き物や自然とふれあう

・身近な生き物をよく観察してみましょう。

・自然観察会への参加や登山など自然体験の機会を持ちましょう。

○生物多様性について学び・考える

・興味をもった生き物について、図鑑やインターネットで調べてみましょう。

・一番身近な水や空気がどこで生まれたのか考えてみましょう。

・食卓にのぼる食材がどういうところで生産されたか調べてみましょう。

○動物や植物などの生き物を守る行動をする

・ゴミの分別や節電などにしっかり取り組みましょう。

・季節に合ったものを食べることは、自然への負担を抑えることにもつながります。旬のものを食べるように心がけましょう。

・作物の多様性を守るために、その土地にあった伝統野菜を生産し、進んで食べるようにしましょう。

・ペットは最後まで責任を持って飼いましょう。